

RPF小型燃焼炉で新エネ事業

マルエイ、蒸気を販売

古紙など原料秋田屋フーズ工場に設置



蒸気を発生させる小型回転型燃焼炉RPFボイラー。関市洞戸飛瀬、秋田屋フーズ洞戸工場

総合エネルギー事業を展開するマルエイ（岐阜市入舟町、澤田栄一社長）は、食品製造秋田屋フーズの洞戸工場（関市洞戸飛瀬）に、古紙や廃プラスチックを主原料とした固形燃料（RPF）を使う小型回転型燃焼炉を設置し、発生した蒸気を販売する新たなエネルギー供給事業に乗り出す。マルエイによると、小型回転型燃焼炉の設置は国内初。RPFボイラーは重油を燃焼させるボイラーに比べて、二酸化炭素の排出量を削減できるメリットがある。9月中に本格稼働させる。

（山本貴史）

RPFは再利用できない古紙や廃プラスチック類が主原料。マルエイは、RPF製造業者エコムカワムラ（安八郡輪之内町）から購入し、ボイラーで発生した蒸気を秋田屋フーズに販売して収益を得る仕組みで、年間約5千万円の売り上げを見込む。RPFボイラ

ーの購入費、建屋と燃料ヤードの建設費を含めた整備費用は総額約4億円。秋田屋フーズの敷地に無償貸与する形で設置し、設備のメンテナンスも担う。秋田屋フーズは、養蜂・食品製造の秋田屋本店の関連会社。ボイラーの蒸気を工場に製造するゼリー飲料

の加熱、殺菌処理工程の熱源にしている。重油を燃料にしているが、原油価格変動の影響を受ける課題の解消、環境問題への取り組みとしてRPFボイラーの活用を決めた。年間で燃料費は約2割、二酸化炭素排出量は約1500トンを削減できるといふ。稼働後は工場ですべての蒸気全体の6、7割がRPFボイラーによって生み出された蒸気に置き換わるという。

マルエイの澤田社長は「二酸化炭素に加えて燃料費も削減できる。削減によって生まれた資金を、他の設備導入や二酸化炭素排出権の取引に回せる」とメリットを語った。